

39 大型展示会への出展時の事務的な課題～大阪関西万博への出展を通じて感じたこと～

研究所 高橋智、井上剛伸、高野弘二、中村隆、伊藤和幸、中山剛、船瀬新王
病院 木村麻美

企画・情報部 柴崎明

大阪・関西万博公式イベント「Health Design 輝き、生きる ～Live Brighter～」が令和7年6月21日～29日の9日間開催され、その中で国立障害者リハビリテーションセンターは「障害者自立支援機器 ～「つなぐ」テクノロジー」をテーマとした展示を行いました。「眼球運動を活用したスイッチ入力システム」「ジェスチャー認識を活用したインターフェース」「遠隔就労支援ロボット」「こどもの義手」の4つの展示を行い、展示期間中の9日間で約1,200人程の来場があり、来場者へ行ったアンケート結果も概ね好評でした。

本稿では万博という大型イベント出展にあたっての様々な事務的な作業について述べさせていただきます。

万博への国リハ出展が決まりまず行うこととして「予算要求」があります。令和6年度予算要求を行う際、当初は令和6年度予算で「研究所で展示する機器3件（視線、ロボット、ジェスチャー）の本体製作」「展示機器の解説ビデオの作成」令和7年度予算で「万博本番事のブース設営・運営業務」を要求しようとしていたところですが、国リハの会計課への資料登録、本省要求、財務要求の各過程で検討・調整を重ねていった結果、展示物として「こどもの義手」の追加、展示物の外装・デザインの制作、プレ公開の実施等が追加されていきました。

令和5年度補正予算、令和6年度本予算、令和6年度補正予算、令和7年度補正予算とそれぞれ予算が成立するごとに、金額に応じ入札等の手続きを踏み大小あわせ50件を超える契約を行ってきました。

各調達と並行して各展示担当毎・国リハ出展担当全員・あるいは施設管理室等々と展示内容の検討を行っていきましたが、時にはコミュニケーション不足・誤解等による認識のズレが生じることもありました。信頼関係を築きながらの円滑な調整に各担当者等も心がけていただき、その度に展示内容もより具体的に充実したものになっていったと思います。また、国リハブースの面積がなかなか決まらない等の万博協会からの連絡の遅れ・変更等も度々あり特に情報共有を密にすることの重要性を痛感しました。契約完了後は、映像制作、展示物の製作、ブース設計・設営、当日の運営業者等々との調整も加わり、また万博出展が近づくにつれ、日々入ってくる情報量が過多になりその整理・共有、提出書類等の作成におわれていました。

万博実施期間中の事務業務としては、日々の運営側から伝達事項等の整理・共有、また、万博出展期間中は毎日のX投稿を目標にし、休日も含め投稿を行いました。

事務方としては、大規模イベント実施のノウハウがない中、手探りで業務を進めていくことは、まだまだ課題が残ります。また、情報共有・関係各所との連携等は日頃から心がけていることですが、このような大規模簿イベント実施にあたっては、関係者間の情報共有・周知方法、連絡手段、各者の役割の明確化等々その重要性をより認識したところです。